名古屋女子大学　紀要　**39**（人・社）　283～290　1993

ブライズデイルにおける共同体と楽園神話
――カヴァデイルにとってのブライズデイル――

羽澄直子

The Community in Blithedale and the Garden Myth
――Coverdale's View on Blithedale――

Naoko HAZUMI

『ブライズデイル・ロマンス』（*The Blithedale Romance,* 1852）の舞台となっている共同体は、作者ナザニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）が一時期参加していた社会主義的共同体ブルック・ファーム(Brook Farm)をモデルとしている[1]。が、ホーソーンはそのことを序文の中で認めてはいるものの、ブライズデイルの共同体はブルック・ファームとは同一視されるものではない、ロマンスを書くための資料としてブルック・ファームでの思い出を利用したにすぎないとも述べている。

> ... the Author has ventured to make free with his old, and affectionately remembered home, at Brook Farm, as being, certainly, the most romantic episode of his own life—essencially a day-dream, and yet a fact—and thus offering an available foothold between fiction and reality. (*The Blithedale Romance 2)*[2]

白昼夢かつ事実とは、ホーソーンがブルック・ファームに抱いた希望とそこで味わった失望を意味している。ブライズデイルに投影されているのは、虚構と現実が濃密に交錯した場としてのブルック・ファームである。そこで「白昼夢かつ事実」という世界を体験し、虚構と現実の橋渡しをするのが、語り手カヴァデイル(Coverdale）である。カヴァデイルの語りは、ブライズデイルでの夢が実現化には至らずに、徐々に虚構化していく過程を厳しい現実として提示するもの、つまり聞き手を白昼夢から事実へと導くものである。が、一方で白髪まじりの独身の中年男（カヴァデイル）が、理想的共同体建設が失敗に終わったという現実認識をふまえたうえで、虚構と化した若き日の出来事を回想するという形式をとっているため、聞き手は事実から白昼夢の世界へといざなわれることにもなる。カヴァデイルの語りは虚構と現実、どちらともいえる、もしくはどちらともいえない空間を構築する。今や意欲も情熱も失った中年男となった彼も若き日々を語ることで虚構と現実、２つの世界とそのはざまをさまよい続け、その中に彼なりの真実を見いだすのである。

> Yet, after all, let us acknowledge it wiser, if not more sagacious, to follow out one's day-dream to its natural consummation, although, if the vision have been worth the having, it is certain never to be consummated otherwise than by a failure. And what of that! Its airiest fragments, impalpable as they may be, will possess a value that lurks not in the most ponderous realities of any practicable scheme. They are not the rubbish of the mind. Whatever else I may repent of, therefore, let it be reck-

> oned neither among my sins nor follies, that I once had faith and force enough to form generous hopes of the world's destiny... (10-1)

一体カヴァデイルはどのような夢をかかげてブライズデイルにおもむいたのであろうか。この共同体の目的は、世の中を改革すること、すなわち "the false and cruel principles" (19) を基盤にしてきた既成の社会システムをこわし、肉体労働と知的活動を通じて互いに助けあって利益を分かちあう新しい社会を構築することにある。しかし共同体のめざす「より良い生活」と引換えにカヴァデイルが捨てようとしている町の生活は、快適で何不自由のないものであった。従ってブライズデイルへの出発に際して彼には多少のためらいはあった。加えて霊能者「ヴェールを被った女（Veiled Lady)」による予言は旅立とうとする彼にブライズデイルに対する不信感を植えつけたし、出発当日の悪天候は、早く普段の生活に戻れと警告する "a symbol of the cold, desolate, distrustful phantoms that invariably haunt the mind" (18) として、彼の不安をあおる。それにもかかわらず彼とその仲間がブライズデイルに向かい英雄的かつ無謀な（と中年のカヴァデイルは呼ぶ）夢を語りあえたのは、彼らが自分たちの思想に「楽園神話（the garden myth)」を取り入れたためではないかと考えられる。つまり彼らは人工的で、古い因習に毒された町を捨てて新たなユートピア創造をめざすことと、彼らの先祖が旧大陸を飛び出してヴァージンランドに新しい理想の国を築こうとした歴史を重ねあわそうとしたのだ。カヴァデイルは素朴かつ力強く燃えるブライズデイルの暖炉の火を見て、昔の清教徒移民達に思いをはせる[5]。社会改革という彼らにとって未知なる目標をかかげる共同体への不安は、詩的で牧歌的なユートピア建設というアメリカ建国以来の夢を意識することで、ひとまず棚上げされる。ブライズデイルをエデンの園にたとえ、"Arcadia", "Pastoral", "Paradise" と呼ぶことで、カヴァデイルらは自らに暗示をかけているのである、「ブライズデイルには輝かしい未来が開けている」と。中年となったカヴァデイルにはブライズデイルのだんろの火も燃えさしのようなものとしか思われず、当時の自分たちを "a knot of dreamers" (14) と自嘲気味に呼ぶが、若き日々の彼らにはだんろの火は確かに赤々と輝いて見えたし、その明るい火が、楽園構築の夢の実現を約束しているように感じたのである。楽園を意識するあまり、カヴァデイルはブライズデイルに着く早々女性たちが家事労働に携わるのを見て、思わず次のように嘆く。

> "What a pity," I remarked, "that the kitchen, and the house-work generally, cannot be left out of our system altogether! It is odd enough, that the kind of labor which falls to the lot of women is just that which chiefly distinguishes artificial life—the life of degenerated mortals—from the life of Paradise. Eve had no dinner-pot, and no clothes to mend, and no washing-day." (16)

レオ・マークス（Leo Marx）の『楽園と機械文明』（*The Machine in the Garden*）によると、都市に住むアメリカ人の抱く楽園神話には2種類あるという。1つは "popular and sentimental"、もう1つは "imaginative and complex" で形容されるパストラリズムである。前者を信奉する者は都会生活を軽蔑し、より自然な環境を求めて都会から脱出する傾向にある（Marx 5）。これはブライズデイルへ向かうカヴァデイルの行動と一致する。彼は町を頽廃と堕落のシンボルと考えている。町は "artificial" で "old conventionalism" に毒された "the greedy, struggling, self-seeking world" (20) なのである。彼は汚れた町の対極ともいうべきブライズデイルを目指してボストンを脱出する。町の存在が不自然で汚れていればいるほど、ブライズデイルは自然で無垢な地として輝かしいものとなる。カヴァデイル達は緑豊かな田園に、マークスが "the psychic root of all pastoralism" と称した "a simpler, more harmonious style of life, an existence

'closer to nature' "(6)を確立しようとする。

とは言うものの、吹雪の中ようやくたどりついたブライズデイルの「無垢な」自然は過酷なものであった。カヴァデイルより一足先にブライズデイルにやってきたゼノビア（Zenobia）は、家事労働は楽園のイヴには不似合いというカヴァデイルに対して" '[W] e shall find some difficulty in adopting the Paradisiacal system, for at least a month to come. Look at that snow-drift sweeping past the window! Are there any figs ripe, do you think?' " (17)と答え、自然の摂理に従って楽園生活を送ることの難しさを示してカヴァデイルの意気込みに水をさす。マークスのいう「感傷的な」楽園神話を信奉するカヴァデイルはさすがにやせがまんしながらも、"How cold an Arcadia was this!" (38) と言わずにはいられない。翌日カヴァデイルは余りの寒さに風邪をひいて寝込んでしまう。これは軟弱で汚れた都会人が健全で無垢な Arcadia の住人となるための試練であった。仲間の１人ホリングスワース（Hollingsworth）の手厚い看護を受け回復したカヴァデイルは、自分が病気になったことを次のように解釈する。

> My fit of illness had been an avenue between two existences; the lowarched and darksome doorway, through which I crept out of a life of old conventionalisms, on my hands and knees, as it were, and gained admittance into the freer region that lay beyond. In this respect, it was like death, (61)

一度死を経験することで、これまでの町の生活で身についた "a thousand of follies, fripperies, prejudices, habits, and other such worldly dust" (61)というものがすっかり拭い落とされたカヴァデイルは清められ別人として再生する。それは堕落以前のエデンに住む無垢な姿のアダムを連想させる。人類の父祖、初源の人としてのアダムの母は、当然のことながら「自然」である。

> In my new enthusiasm, man looked strong and stately!—and woman, oh, how beautiful!—and the earth, a green garden, blossoming with many-colored delights! Thus Nature, whose laws I had broken in various artificial ways, comported herself towards me as a strict, but loving mother, who uses the rod upon her little boy for his naughtiness, and then gives him a smile, a kiss, and some pretty playthings, to console the urchin for her severity, (62)

農作業にも慣れ、共同体の運営も軌道に乗っていく。作業着を着て働く自分たちは、絹のズボンや造花のばらのついた靴をはいている "the pastoral people of poetry and the stage" (63) とは違い、現世の Arcadian であるという自負も生まれてくる。カヴァデイルはホリングスワースに言う、" 'The Ages have waited for us, and here we are—the very first that have essayed to carry on our mortal existence, in love, and mutual help!' " (132)。

ところがカヴァデイルはやがて楽園神話の持つ「もう１つの側面（imaginative and complex）」に気づき始める。この種の楽園には必ず「より現実的な世界」という観念が反発力（counterforce）として併置され、それを意識することで人々は自然豊かな田園が平和と調和を約束してくれるという思想に疑問を抱くというものである（Marx 25)。農作業の成果が上がるにつれ、カヴァデイルは予想もしなかった矛盾に気がつく。

> The peril of our new way of life was not lest we should fail in becoming practical agriculturalists, but that we should probably cease to be anything else. (65)

彼は激しい肉体労働と知的、哲学的活動は到底両立しえないと感じ始める。

> The clods of earth, which we so constantly belabored and turned over and over, were never etherealized into thought. Our thoughts, on the contrary, were fast be-

coming cloddish. (66)

肉体労働がカヴァデイルに教えたことは、"yoeman" と "the man of finest moral culture, though not the man of sturdiest sense and integrity" (66) は全くの別ものということ、すなわちブライズデイルで農作業にいそしむ限り、共同体がかかげた理念――労働を精神化し、生活を簡素に、思考を高くする――は実現不可能ということだ。カヴァデイルが詩人かつ情熱的な改革者であるためには有能な農夫ではいられないように、ブライズデイルの農場を管理する農夫サイラス (Silas) は、プロの農夫でいる限りユートピア建設をめざす共同体の思想の共鳴者にはなりえない。サイラスにとって農園は理想的未来を作りだす場ではなく現実の生活の場、農作業は平等でより良い社会を作る手段ではなく日々の生活の糧を得るための仕事である。利益を上げるためには共同体の理念が否定する競争の原理も必要であり、近所の農夫達と張りあわねばならない。彼らも共同体の農場を商売敵とみなし、敵意をむきだしにし、素人集団に何ができると嘲笑する。社会の平和と協調を目指す共同体は社会の敵対心をかき立てながら始められたのであった。

ホリングスワースは共同体の計画は実際的ではないと軽蔑するが、カヴァデイルはホリングスワースやサイラスのかかげる practical purpose は余りにも具体的、通俗的すぎて、高邁で非利己的な（と彼は信じている）ブライズデイルの計画を脅かすのではと不安を感じる。しかし良きにつけ悪きにつけ、"practical" ということと無関係な状態で何かが具体化し実現することがあるだろうか。やがてカヴァデイル自身も気づくのだが、ブライズデイルの志の高い計画は、理論の中にある限りでは理想的なものなのだが、いざ実行してみようとすると、様々な現状に直面し、行き詰まる。楽園建設の現実化は遅々として進まない。機械文明に触れた現代人は "a popular and sentimental pastoralism" を無条件で信じ続けられる程うぶではいられない。そこで "an imaginative and complex pastoralism" を意識せざるをえなくなるのだが、この時楽園という概念には必ず「現実」という反発力が併置されるというのなら、つまり「楽園」と「現実」は反発しあうものだというのなら、楽園とは虚構でしかありえないということにならないか。「現実」を反発力として意識しなければ「楽園」は想定できないということか。そうだとすれば、そのような楽園神話を導入した時点でブライズデイルの企ては失敗が運命づけられていたと言えるだろう。ブライズデイル到着の日、カヴァデイルは自分達の行動を昔の清教徒の移民にたとえた。しかし彼は、移民から二百年たった今、自分たちが清らかで緑豊かな地での新しい生活を計画しなければならないのは、先祖達がヴァージンランドの定住には成功したものの、ユートピア建設は果たせなかったという事実のせいだということに気づいていない。楽園となるはずの新生地アメリカが旧大陸の過ちを再演していると感じたからこそ新たに楽園を渇望したはずなのに、彼らは活動を始める際、先祖達を手本にしようという過ちを犯した。その結果彼らが先祖の失敗を繰り返し、白昼夢をむなしく追うことになるのは予測されたなりゆきといえるのかもしれない。

楽園は虚構としてのみ存在するというパラドクスを認識すると、社会改革をめざす共同体の意義と楽園建設の夢を直結させていたカヴァデイルにとってブライズデイルの魅力は薄れていく。共同作業から抜け出し森の中から１人で農場の様子を眺める彼は、共同体の一員である自覚は持ちながら、完全に同胞とはなりきれない個としての自分を意識する。それは共同体の理念に対する懐疑を生む。

I suddenly found myself possessed by a mood of disbelief in moral beauty of heroism, and a conviction of the folly of attempting to benefit the world. (101)

共同体に興味を持って見学に来る外部の者がブライズデイルの住人を "as poetical as Arcadians, besides being as practical as the hardest-fisted husbandmen in Massachusetts" (81) としてたたえていることがカヴァデイルには滑稽に見えてくる。

ブライズデイルでカヴァデイルらが目指した楽園の虚構性を示すのが、ゼノビアの存在であろう。カヴァデイルが彼女をエデンの園のイヴに見立てているのは意味深い。楽園の住人ではあるがイヴは楽園を喪失させる原因となる者だからだ。ゼノビアはフェミニストの観点から社会改革を推進させようともくろんでいる「進歩的な」女性であるが、彼女の女王然とした美しさはブライズデイルを "an illusion, a masquerade, a pastoral, a counterfeit Arcadia" (21) に見せるものだとカヴァデイルは感じる。彼女のトレードマークは髪に飾られた温室からとってきたような異国風の花、つまり自然とは相反する人工的な花である。最終的にゼノビアはホリングスワースとの破局がきっかけで入水自殺を遂げる。カヴァデイルは彼女が入水という方法を選んだことに "some tint of the Arcadian affectation" (237) を感じる。

> [Zenobia] had seen pictures, I suppose, of drowned persons, in lithe and graceful attitudes. And she deemed it well and decorous to die as so many village-maidens have, wronged in their first-love, and seeking peace in the bosom of the old, familiar stream—so familiar that they could not dread it—where, in childhood, they used to bathe their little feet, wading mid-leg deep, unmindful of wet skirts. (236-7)

楽園ならば、川の水（自然）は傷心のゼノビアを優しく扱い、美しいままの姿で眠りにつかせたことだろう。神話の中での自然は常に人間を愛してくれる。しかしブライズデイルの川では、彼女は醜い水死体となって発見されるという残酷な現実が見せつけられる。中年のカヴァデイルは次のように述懐する。

> While Zenobia lived, Nature was proud of her, and directed all eyes upon that radiant presence, as her fairest handiwork. Zenobia perished. Will not Nature shed a tear? Ah, no! (244)

ゼノビアが共同体の目指した楽園的性質を内側から脅かすものなら、ホリングスワースとウェスターヴェルト（Westervelt）は外側から侵すものである。楽園という概念に付随する反発力についてマークスは次のように説明する。

> We should understand that the counterforce may impinge upon the pastoral landscape either from the side bordering upon intractable nature or the side facing advanced civilization. (25-6)

ホリングスワースとウェスターヴェルトの２人はこれら２種類の反発力を具現するものである。

かつて鍛冶屋であったホリングスワースと「鉄」のイメージは切り離せない。鉄は楽園を脅かす機械文明、すなわち "advanced civilization" を示す。ホリングスワースの思想は他の共同体のメンバーが目指したような家畜や土相手の労働から生まれるものではなく、鉄からたたきだされたものだ。彼は言う、" 'I have hammered thought out of iron, after heating the iron in my heart!' " (68)。彼はカヴァデイル達の計画に賛同してブライズデイルに来たわけではない。自分の改革計画を実行する基盤として利用するつもりで参加したのであった。彼の目的は「人類の進歩のための社会改革」という抽象的でつかみどころのないものとは違い、犯罪者の更生という１点に絞られた具体的で確固としたものだ。唯１つの目的に固執するホリングスワースの意思堅固な姿は、カヴァデイルには "steel engine of the Devil's contrivance" (71) とうつる。ホリングスワースの良くも悪くも鉄のような強さとかたくなさがゼノビアを死に追いやり、ブ

ライズデイルに埋葬場を作らせ、人間の mortality（死）という、楽園に対する反発力を認識させることとなる。

ウェスターベルトに関しては、カヴァデイルはブライズデイルを訪問した彼に初めて会った時、不快感を覚える。彼はしゃれた服を着こなすハンサムな青年で、人工的な輝きを放つ歯を見せて金属的な笑いをうかべる、いかにも "worldly society" を示すような都会人である。ホリングスワースが物理的な力で楽園を圧倒する機械ならば、ウェスターヴェルトは精神の領域で腐敗をまき散らす "humbug", "sham" (95), "a cold and dead materialism" (200) である。ブライズデイルに逃れてきた少女プリシラ (Priscilla) はかつて彼によって霊能者にしたてあげられ見せ物にされていた。亡霊のように（と、カヴァデイルは感じた）ブライズデイルの森に現れたウェスターヴェルトは反発力としての "intractable nature" であり、死をイメージするものだ。へびを彫刻したステッキを持ち、目からは悪魔がのぞくとカヴァデイルが描写するウェスターヴェルトからはエデンの園に現れたへびが連想される。事実彼はカヴァデイルがイヴと呼ぶゼノビアをかつて魅了し、夫婦関係にあったのだ。彼が訪ねてきたことで、ブライズデイルでのゼノビアとプリシラの生活は転機を迎える。

共同体の理念の１つは、互いに理解し助けあう人間関係を確立することであった。自分の利益のみ追求して他者と争う人々も、自然にはぐくまれたブライズデイルでは、個々が協調しすべてを平等にわかちあえるようになるとカヴァデイル達は考えていた。田園の中には平和と調和があるというのは、楽園神話を形勢する重要な条件である。しかし実際にはブライズデイルでは表立った不和は見られなかったものの、ホリングスワース、ゼノビア、プリシラの３人は他のメンバーから少し距離をおいている。カヴァデイルは２つのグループのどちらにも精神的に所属できない中途半端な立場にある。ホリングスワースとの意見の衝突がきっかけで、彼はブライズデイルを一時的に去ることを決心する。「対立」の生じたことで、ブライズデイルが彼にとって楽園となる可能性はますます薄れていく。ブライズデイルに関する楽園神話は消え失せようとしている。

> Blithedale was no longer what it had been. Everything was suddenly faded. The sun-burnt and arid aspect of our woods and pastures, beneath the August sky, did but imperfectly symbolize the lack of dew and moisture that, since yesterday, as it were, had blighted my fields of thought, and penetrated to the innermost and shadiest of my contemplative recesses. (138)

もともと共同体の一員としての自覚を持ちながらも " [t] he better part of [his] individuality" (89) を保つために１人になる時間が必要と考える彼は、調和のための孤立を求めて時々森の隠れ家にこもり、そこから労働する仲間を覗き見たりしていたのだが、楽園神話に幻滅し始めた頃から自分が他のメンバーに対して傍観者でしかいられないと感じるようになる。ブライズデイルは誤って入りこんでしまった本来ならば彼には属せない世界で、いつかは肉体的にも精神的にも訣別しなければならない。しかし彼はその世界に対する興味を捨てられない。だから覗き見をする。このような方法で部外者カヴァデイルはブライズデイルとのかかわりを保とうとする。

ブライズデイルが色あせた風景となっていくと同時に、町に対するカヴァデイルの印象も変化する。久しぶりに見る町は相変わらず "foggy", "stifled", "sordid" (146) といった言葉で形容される汚ならしい所であるが、カヴァデイルの心にある種の安らぎを与える。町の騒音について彼は "just as valuable, in its way, as the sighing of the breeze among the birch-trees, that over-

shadowed Eliot's pulpit" (147) とさえ感じる。ブライズデイルでの田園生活は、彼の町に対する見解を変えた。ブライズデイルに行きさえすれば理想的な共同体ができるという夢が失われて以来、町＝文明＝汚濁、田舎＝自然＝清楚という単純な二項対立は彼の中では成立しなくなった。ホテルの部屋でくつろぐうちに、彼には町の生活も農場での生活も同じようにぼんやりしたものになっていく。特にブライズデイルでの出来事はすべて自分の空想の産物だったような気さえしてくる。彼は言う、" 'I had never before experienced a mood that so robbed the actual world of its solidity' " (146)。そんな彼を現実に引き戻したのは町で思いがけず見かけたゼノビア、プリシラ、ウェスターヴェルトの姿であった。観察者という自分の立場を思い出したカヴァデイルは、自分のいる部屋の向かいの下宿屋に滞在する3人の様子を覗き見する。この3人にホリングスワースがからむことで何か悲劇が起こる予感がしたのだが、彼はあくまでも傍観者であった。

> As for me, I would look on, as it seemed my part to do, understandingly, if my intellect could fathom the meaning and the moral, and, at all events, reverently and sadly. (157)

ウェスターヴェルトに再び捕らわれ、霊能者「ヴェールを被った女」として舞台に出たプリシラは、ホリングスワースに救われてブライズデイルへ戻る。ゼノビアも2人のあとを追う。カヴァデイルもブライズデイルに向かう。

カヴァデイルは共同体の一員として再び労働をするつもりはなかった。今の彼は農場での労働を " [t] he curse of Adam's posterity" (206) と呼ぶ。ブライズデイルは楽園喪失以後の世界なのである。ブライズデイルに彼が託した夢はすでに白昼夢のようなものとなっている。実際に農場や建物を見ても "nothing but dream-work and enchantment" (206) のように思える。彼がブライズデイルに着いた時かつての仲間がちょうど仮装大会に興じていたことも、共同体で目指した夢の虚構性を実感させた一因である。再訪の理由はホリングスワースと2人の女性との関係を最後まで見届けたい、ただそれだけであった。ゼノビアの死体を見つけ埋葬した後は、ホリングスワースの様子をただ見るために出かけた以外は、2度とブライズデイルを訪れることはなかった。ホリングスワースが罪の意識から世捨て人のようになりプリシラにすがりながら余生を過ごすのを見て、カヴァデイルはようやく彼を許す気になる。

楽園神話の幻想の虚しさを一度知ってしまった人間は神話を無条件に信じたくとも信じられなくなる。

> As regards human progress, (in spite of my irrepressible yearnings over the Blithedale reminiscences,) let them believe in it who can, and aid in it who choose! If I could earnestly do either, it might be all the better for my comfort. (246)

カヴァデイルも本当はもう一度夢を見たいのである。世間的には詩人として成功していたが、現状の生活には何の目的も持てず、そのために自分の人生は虚しいと感じている。しかし夢を見ても虚しいということも知っている。彼はいわば禁断の知恵の実を食べてしまったのである。ここに中年となったカヴァデイルの憂鬱がある。いつか誰かが " [their] beautiful scheme of a noble and unselfish life" (245) を実現してくれるかもしれないその時まで、彼は巡礼のように虚構と現実をさまよい、傍観者であり続ける気である。

> Then, should the colonists of Blithedale have established their enterprise on a permanent basis, I might fling aside my pilgrim-staff and dusty shoon, and rest as peacefully here as elsewhere. (140)

楽園への夢が仮定法を使って語られる限り、傍観者としてのカヴァデイルの彷徨に終わりはなさそうだ。彼が回想記の一番最後に "I—I myself—was in love—with—Priscilla!" (247) といういささか唐突ともいえる告白をしたのは、楽園神話への不信を決定づけたゼノビアの自殺の原因となった三角関係に傍観者以上のものとしてかかわりたかったという彼の精一杯のあがきであろうか。

Notes

1　1841年から47年までボストン郊外で実施されたブルック・ファームでは、町での人工的で堕落した生活を脱し、自然の中での肉体的および知的労働を通してより自由で簡素な生活を確立することを目指していた。ホーソーンがそこに参加したのは、共同体の思想に共鳴したというよりは経済的理由からであった。農場で新婚生活を始めるつもりだったのだが、労働の厳しさにうんざりし、共同体のあり方にも疑問を抱き、さらに執筆活動にも支障をきたすと考えて、わずか半年程で農場を去ることになる。

2　*The Blithedale Romance* からの引用は以後文中のかっこ内にページ番号を示す。

3　ブルック・ファーム到着直後に出した婚約者への手紙に、ホーソーンは "Here is thy poor husband in a polar Paradise! I know not how to interpret this aspect of Nature—whether it be of good or evil omen to our enterprise. But I reflect that the Plymouth pilgrims arrived in the midst of storm and stept ashore upon mountain snow-drifts; and nevertheless they prospered, and became a great people—and doubtless it will be the same with us." と書いている。(*The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, vol. XV* 526)

Works Cited

Bloom, Harold, ed, *Nathaniel Hawthorne.* New York: Chelsea House, 1986.

Hawthorne, Nathaniel. *The Blithedale Romance.* 1852. New York: Penguin Books, 1985.

———. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne.* Ed, Thomas Wooden, Neal Smith, and Norman Holmes Pearson. Vol. 15. Columbus: Ohio State Univ. Press, 1984. 20. vols.

Kaul, A. N. ed. *Hawthorne: A Collection of Critical Essays.* New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1966.

Marx, Leo. *The Machine in the Garden.* New York: Oxford Univ. Press, 1964.

Smith, Henry Nash. *Virgin Land.* Cambridge: Harverd Univ. Press, 1950.

酒本雅之.『ホーソーン』.　東京：冬樹社　1977.